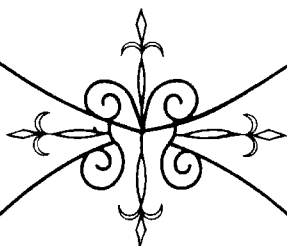




# 三島由紀夫全集



31

VII

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳  
編纂／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新 潮 社

本文印刷 株式会社精興社

口絵印刷 松本精喜堂印刷株式会社

付録印刷 株式会社精興社

口絵製版 株式会社学術写真製版所

製本 大口製本印刷株式会社

製函 日本紙バルブ商事株式会社

本文用紙 特漉上質紙・三菱製紙株式会社

皮革 榎井皮革株式会社

表紙用紙 手漉局紙キラ引・株式会社山田商会

扉用紙 ゴールデンアロー・特種製紙株式会社

見返用紙 しぶ茶堅紙・特種製紙株式会社

函用紙 Sペラン絹目・特種製紙株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
ください。送料小社負担にてお取替えいたします

三島由紀夫全集 第三十一卷 目次

|                         |    |
|-------------------------|----|
| 利用とあこがれ                 | 九  |
| 三十すぎでのスポーツ              | 二三 |
| 可憐なるトスカ                 | 二四 |
| 藝術家部落——グリニッチ・ヴィレッ       | 二六 |
| ジの午後                    | 二八 |
| 久保田万太郎氏を悼む              | 三〇 |
| ロマンチック演劇の復興             | 三三 |
| 「薔薇刑」體驗記                | 三五 |
| 變質した優雅                  | 三六 |
| 小説家の息子                  | 三八 |
| 拷問と死のよろこび——映畫「惡徳の榮え」をみて | 四〇 |
| 藝術斷想                    | 四二 |
| 捨てきれぬ異常の美——女形は亡びる       | 四四 |
| かどうか                    | 四六 |
| 殘酷美について                 | 四八 |
| 跋（林房雄論）                 | 五〇 |

|                                |     |
|--------------------------------|-----|
| 天下泰平の思想                        | 一三〇 |
| 一S・Fファンのわがままな希望                | 一三二 |
| 未知への挑戦——海老原IIポーン               | 一三六 |
| 新延若丈の洋々たる未來                    | 一三八 |
| 女の業                            | 一四〇 |
| 西洋人の夫婦                         | 一四二 |
| コクトーの死                         | 一四四 |
| オペラといふ怪物                       | 一四六 |
| わが創作方法                         | 一四八 |
| 見合ひ結婚のすすめ                      | 一五〇 |
| 夜の法律                           | 一五二 |
| 文學座の諸君への「公開狀」——「喜びの琴」の上演拒否について | 一五四 |
| 作者のことば（音楽）                     | 一五六 |
| 一冊の本——ラディゲ「ドルヂェル伯の舞踏會」         | 一五八 |
| ウソのない世界——ひきつける野性の              | 一六〇 |

|                          |    |
|--------------------------|----|
| 魅力                       | 一七 |
| 寫眞集「薔薇刑」のモデルをつとめて        |    |
| ——ふらす・まいなす <sup>63</sup> | 一七 |
| エドガー・ポオ「ポオ全集」知性の斷末       |    |
| 魔                        | 一七 |
| 極限とリアリティー                | 一七 |
| 無題(同人雜誌賞選評)              | 一八 |
| もうすぐそこです                 | 一八 |
| 「空飛ぶ圓盤」の觀測に失敗して——私       |    |
| の本「美しい星」                 | 一八 |
| 跋(團伊玖磨著「不心得12樂章」)        | 一八 |
| 雷藏丈のこと                   | 一八 |
| はじめての本——「花ざかりの森」         | 一九 |
| 血のやうに赤い落日——「性の衝動」        | 一九 |
| 狐の宿命(關・ラモス戰觀戰記)          | 一九 |
| 現代女優論——賀原夏子              | 二〇 |
| 胸のすく林房雄氏の文藝時評            | 二〇 |

|                           |     |
|---------------------------|-----|
| 解説(「日本の文學 38 川端康成集」)      | 二〇六 |
| 舞樂禮讚                      | 二三  |
| 空飛ぶ圓盤と人間通——北村小松氏追悼        | 二五  |
| 悼                         | 二五  |
| 解説(「現代の文學 20 圓地文子集」)      | 二八  |
| 「楡家の人びと」(北杜夫著)            | 二九  |
| 市村竹之丞に期待する                | 二四  |
| 「喜びの琴」について                | 二四  |
| 松浦演出の「シラノ」                | 二四  |
| 文學における硬派——日本文學の男性的原理      | 二四  |
| 週間日記                      | 二五  |
| 私の小説作法                    | 二五  |
| 私がハッスルする時——「喜びの琴」上演に感じる責任 | 二六  |
| 「六人を乗せた馬車」をみて             | 二六  |
| 夢と人生                      | 二六  |

NLTの顔……………二七

「喜びの琴」について……………二七五

眞實の教訓——選評……………二七七

天狗道……………二八二

生徒を心服させるだけの腕力を——ス

バルタ教育のおすすめ……………二八五

熊野路——新日本名所案内……………二九二

批評の『首府』を建設——河上徹太郎著

「批評の自由」……………三〇〇

「戀の帆影」について……………三〇二

合宿の青春……………三〇五

すばらしい技倆、しかし……………大江

健三郎氏の書下し「個人的な體驗」……………三一

秋冬隨筆……………三二四

私だけの問題ではない——小説「宴の

あと」判決に抗議する……………三七

實感的スポーツ論……………三三

東洋と西洋を結ぶ火——開會式……………三四五

競技初日の風景——ボクシングを見て……………三四九

ジワジワしたスリル——重量あげ……………三五三

白い敍情詩——女子百メートル背泳……………三五五

空間の壁抜け男——陸上競技……………三五七

17分間の長い旅——男子千五百メー

トル自由形決勝……………三六〇

完全性への夢——體操……………三六三

彼女も泣いた、私も泣いた——女子バ

レー……………三六六

「別れもたのし」の祭典——閉會式……………三六八

恐しいほど明晰な傳記——澁澤龍彦著

「サド侯爵の生涯」……………三七

いやな、いやな、いい感じ(高見順著

「いやな感じ」……………三七四

美の亡靈——「戀の帆影」……………三七六

『假面の男』を主題に——安部公房著

|                    |     |
|--------------------|-----|
| 「他人の顔」             | 三七九 |
| 迫力ある「ウエストサイド物語」——初 |     |
| 日を見て               | 三八一 |
| 松浦竹夫氏の夢の實現         | 三八三 |
| ありがたきかな「友人」        | 三八五 |
| 男のおしやれ             | 三八七 |
| 無題(吉本隆明著「模寫と鏡」推薦文) | 三八九 |
| 無題(同人雜誌賞選評)        | 三九〇 |
| 現代文學の三方向           | 三九一 |
| 新夏爐冬扇              | 四〇九 |
| 文學的豫言——昭和四十年代      | 四二三 |
| 無題(服部智恵子バレエリサイタルに  |     |
| 寄せて)               | 四二五 |

|                 |     |
|-----------------|-----|
| 反貞女大學           | 四八八 |
| 法學士と小説          | 五五六 |
| 室町の美學——金閣寺      | 五五〇 |
| 〈美容整形〉この神を怖れぬもの | 五七三 |
| 十月二十三日付私信       | 五七六 |
| 澁澤龍彦氏のこと        | 五七九 |
| ロンドン通信          | 五八〇 |
| 英國紀行            | 五八四 |
| 石原慎太郎「星と舵」について  | 五九二 |
| 解題              | 六〇一 |
| 校訂              | 六三三 |





三島由紀夫全集 第三十一卷 評論 (7)



## 利用とあこがれ

最近讀んだ本で、末松太平氏の「私の昭和史」ほど、深い感銘を與へられた本はない。軍人の書いた文章と思へぬほど、見事な洗煉された文章であり、話者の「私」の位置決定も正確なら、淡々たる敘述のうちに哀切な抒情がにじみ出てゐるのも心憎く、立派な一篇の文學である。殊に全篇を讀み來たつて、エピログの「大岸頼好の死」の章に讀みいたつたときの、パセティックで、しかも殘酷な印象は比類がない。

これは二・二六事件の關係者で、おそらく唯一人の生き残りの、かつての「青年將校」が、冷靜に當時の自分と自分の周圍を描き出したいはば回想録である。しかしこんなに新鮮な回想録といふものもまた珍らしい。

著者が自己の純潔な心情を信じてゐるのは、讀者もそのまま信じてよいわけであるが、過去のこれほどの冷靜周到な分析と、かつて一青年の心に燃えた純潔な炎とは、讀後、どうしても相矛盾する感を否めない。著者自身もそれを承知してゐて、とりわけ美しい冒頭の數章の中で、

「青年將校運動といはれたものも、かういつた左翼の地下運動まがひの時代が、むしろ内容としては充實してゐて、これからあとのブーム時代は、革新といふ意味からいへば、むしろ後退した」

と述べてゐる。

さて、これからは、今日の問題である。

この本の中で、青年將校たちが上官からちやほやされ、こはもてするのは、もちろん利用價值があつたからではあるが、結局は、軍隊といふ特殊な一社會集團において、その集團のモラリティー（士道）を體現するものと目されたからである。

この社會集團には、きびしい規律もあり、階級制度もあり、立身出世主義も功利主義もあるが、それらはいづれもこの集團の本質的特徴をなすものではなく、最後にのこる本質的特徴としてはモラリティー（士道）しかないことを、誰しもみとめざるをえず、しかもその行動的倫理の實現の可能性は、何をしでかすかわからない危険な「青年將校」の中にしかないことを、暗黙の裡にみとめ合つてゐたからである。軍上層部の心理としては、かれらを利用することと、かれらにあこがれることは、ほとんど同義語であつたと考へてよい。

しかし、問題はただ、昔の軍隊にとどまらず、社會が、その立脚すべき眞のモラリティーの保持者を求めて動搖するときには、（そして、宗教も何らその要求にこたへないときには）、すべては似たやうなメカニズムにおいて動く。安保闘争のとき、全學連主流派に對して、田中清玄氏が資金を提供したといふ興味あるニュースは、このことを暗示してゐる。

社會の上層部の道德的自己疎外（あへて腐敗とは云はない）は、隱密に、何ものかを利用しようとし、何ものかにあこがれてゐる。あとはただ、誰がその場所に折よく立つてゐるか、といふだけのことである。

## 利用とあこがれ

利用とあこがれ〈初出〉中央公論・昭和三十八年五月  
〈初刊〉「私の遍歴時代」・講談社・昭和三十九年四月

## 三十すぎでのスポーツ

學生時代にスポーツマンであつた人ほど、社會へ出てスポーツをバタリと止めて肥りだし、もともと體に自信があるから、仕事にも無理を重ね、深酒をし、いつまでも行くとして可ならざるなき若き日の自分を夢みてゐるうちに、しらずしらず、肝臓をこはし、心臓も衰へ、高血壓になり「あの丈夫な人が」と意外に思はせるやうな短命に終る人が多い。かういふ人はもともと丈夫な體に脂肪がついたタイプであるから、一見、豪放に見え、酒の席でも太鼓腹を自慢にして「まあ、こちら立派な御體格ね」などと藝者に言はれていい氣持になり……そのあげくが、働きざかりにポッキリ行つたりする。

一方、學生時代はガチ勉タイプ、スポーツなどには見向きもせず、ひたすら本にかじりついて、社會へ出てからも、デスク・ワークに適性を持ち、偉くなればなるほど自動車に乗つてばかりゐて、親からもらつた足も使はず、道樂で賣藥を買ひ集め、胃痛をインテリの證據と思ひ、うかうか五十をすぎてから急にゴルフに夢中になり、人あるごとにスポーツの效用を吹きまくり、今までの自分をケロリと忘れて、生れついでにスポーツマンみたいに錯覺してゐるうちに、五十まで動かさなかつた機械が急に酷使されて故障を起し、たちまち厄介な老人結核にとりつかれたりする人も多い。

あれこれ思ひ合はせると二十代と五十代との間をつなぐスポーツの橋がないことがもつとも悪い。スポーツ政策もなつてゐないし、社會の考へ方も悪い。スポーツを見るものにしてしまつたテレビも悪い。

三十すぎでのスポーツを、何だか氣恥かしいものに思はせ、ゴルフだけは特別に思はせる世間も悪い。

今こそ、三十代に入つた人たちが一せいに立上つて、「三十代からこそスポーツをやれ」といふ運動をはじめたらどうだらうか。人のためではない身のためであり、自分のかけがへのない一生のためなのである。そのためには社會人が氣輕にスポーツのやれる設備が必要だが、その問題は大きくなるので、又の機會に論じよう。

三十すぎでのスポーツへ初出 ジャパン・スポーツ・クラブ・昭和三十八年五月五日



## 可憐なるトスカ

この臺本の潤色の仕事に携はりつゝ、私はトスカといふ女を、オペラの興へるあの崇高壯大な女人像とちがつて、實に可憐な、無知な、自ら意識しない野性の力によつて、人を滅ぼし己れも亡ぶ、さういふ一人の女として見るやうになつた。それで彼女のやつた行爲は、結果的には、古ローマの女傑もかくや、と思はれるほどの、壓制への果敢な抵抗なのであるが、そこへ行くまでのトスカは、ほとんど自分の行爲の重要性を意識してゐない。羊飼の娘あがりの、美聲と美貌だけで成上つた女で、彼女の美質はすべてイタリアの民衆から直に得たものだが、同時に、世に知られれば知られるほど、その田園風な美質と上流社交界の生活との間にギャップが起り、彼女が革命黨のシンバの畫家なんかには惚れ込むのは、もちろん彼の男振りに惚れたにしても、實は彼の偏見のない精神が、彼女の野趣ある美質をそのまま素直に受け入れてくれたからである。そこでトスカは、ここを先途とします男に惚れ込み、眞裸の純愛をぶつけるが、彼女が眞裸になれば、持つて生れた野性の力も野放圖に働らき、惚れ込んだあまりの常軌を逸した嫉妬が、逆に愛する男を墓穴へ導くことになる。警視總監スカルピアへの全力的抵抗も、決して權力への抵抗ではなくて、ただ女としての、惚れた男へのせい一杯の忠義立てなのだが、それがはからずも、彼女を壯大な政治的悲劇のヒロインにしてしまふのである。